



兼好法師傳考

一卜部姓系統

平磨十九代嫡孫

從二位神祇大副

兼富

長上 大系圖 作兼貞

侍從大藏卿

從二位權大副

兼名

長上 大系圖 從四位下石京大夫 或兼茂子云云

藏人侍從

從二位權大副

兼致

從二位大副

兼俱

長上

兼顯



1118181818

兼好法師傳考

兼好法師傳考

兼好法師傳考

大僧正
慈遍
南朝詔著真衣

從五位上

民部大補

兼雄

藏人

右兵衛尉

兼好

一水戶家藏本

兼好傳云

仕後宇多帝在左兵衛尉常日枕下讀
書尚友古人樂莫過焉

淡哉釋迦堂外無子侍童藤松丸

傳業賴今川貞也云云

傳當作受

山科持言卿此門才檢衣文因合文以而哉智
粒文活求此文就水戶家史官依田志乃傳門
某而始織為兼好在左兵衛尉物也賴文子凡
兼好傳了於天下此書悉乃左兵衛佐也記也
利大系圖印本等々々志兵衛佐也記也柳
益乃々々此物也此江此始傳也了了賴也也

列傳の二區を八の二區射したる所
中平の後家一とあり是れ中平の所
所は江より中平の所とあり是れ中平の所
凡た是れ江より中平の所とあり是れ中平の所
の列一其の五區を八の二區射したる所
江より中平の所とあり是れ中平の所
ら及の二區を八の二區射したる所

又云藤江の二區を八の二區射したる所
中平の所とあり是れ中平の所
精養の二區を八の二區射したる所
人の彼藤江の二區を八の二區射したる所
丁の二區を八の二區射したる所

一 將軍家 布衣 故本村高敷古記所見云

卜部家 神號 元々室河より幕府に館と
同とありと遊と地名も同と高と號と並
主河 神號 室河より中平の所とあり
師 神號 室河より中平の所とあり

一 師 神號 卜部姓也元神祇官之卜部也是也
卜之役也延喜式所見在法成對馬伊豆故云
是也卜部對馬卜部伊豆卜部三流也後世

彌下部大令高流元伴豆下部也其祖平
磨也他家傳大中長清磨之別流之由此僻
說歟其證云云代實錄云元慶五年二月
乙亥朔己卯尾張國中為部從五位下行丹波
介下部宿禰平磨卒平磨者伊豆國之人
也知而習龜卜之道為神祇官之下部揚火
作龜決義疑多効兼和之初遣使聘唐平磨
以善卜術備於使部使還之後為神祇大史
喜祥三年轉少祐齊衡四年授外從五位下天安
二年拜權大祐兼為宮主貞觀八年遷參河
權介十年授從五位下累歷備後丹波介卒

七年七十五云云

○具元云下部姓成大中長傳姓止事
止之是也通好伯父兼俱よりいひ出らる
歌傳書以因法上人所撰抄
以二書と作者として施于世流るる兼俱
代は即ち始傳稱せし中世よりいひ出らるる
之の也畢竟兼俱と後醍醐天皇法成法成之
後家系の好稱するもの兼俱よりいひ出らるる
予ら此の友東に貴姓の法類下部其職に
止唱せんといふものなり
一 實元文化山水権中の言源光玉御給て萬葉集

と政解せしむし松永貞徳歎む其弟子嘉
の復く山本春正同字深平恒人清水宗川五人の
老軍と稱ふ事と京橋南保北市仲少九二年
と及ひる事集珍談に於てありし時異邦に書
籍に本探探出せられた家来儒士板垣文左衛門
某吾邦の書籍に中擬と搜出する春正門人
原安通なりと云ふ事通之變の古なりと喜ば
始七十歳少し死しうと云ふ古老の事と魚好
親應元年六十歳を平十と稱ふ九代
後宇多院の弘安七年甲申年はくらの生連と天下因く
魚好の事實と記せり 後宇多帝の御代有

と云ふ故清少正信は朝廷よはり事と云ふは其辭也
年年分明ありて一葉好數七十の好花と云ふ故
清少正信中より十歳と云ふ事と出見り弘安十二年
御位は退き後元五帝と歴く終清少子
^{九十五}後醍醐の事一 所傳なる事好との始
^{九十一}伏見院 後伏見院は乃ち先禁中北院とあり
^{九十三}後深院 花雪院より事と云ふは後鳥羽人及び
た事射少一伴と云ふ事 後宇多北院と云
ことと云ふ事所少し山本と云ふ事と云ふ事
知るべしと云ふ事
一 具元と云ふ事と魚好の一生は事実と連綿し記

予のこの書は... 寛保四年... 禁中... 中宮... 御
初版

清使... 御... 御... 御...

御... 御... 御...

御... 御... 御... 御... 御...

御... 御... 御... 御... 御...

圖太曆凡卷
數百卷計其
中朝廷ノ事ニ
カニ趣キ拔テ
三十二卷トスル
モノ千世流布ス
此旨其本奥
記セリ中園
内大臣公方云
ノ作ナリ

あつせりや本家からあつせり
下り流るゝ終るあつせり

三辰
園太曆ハ云々秋ノ隅怪鳥二羽居庭上魚好
朝臣自取胡録持重藤梓ら怪鳥と射落ス
一羽と似鴨有黒毛一羽と似鷹其身赤
醫儒其外視之其名と不辨船内ありして此
兩批去兼好れ功感之云云

あつせりや本家からあつせり
下り流るゝ終るあつせり
あつせりや本家からあつせり
下り流るゝ終るあつせり

あつせりや本家からあつせり
下り流るゝ終るあつせり

あつせりや本家からあつせり
下り流るゝ終るあつせり
あつせりや本家からあつせり
下り流るゝ終るあつせり
あつせりや本家からあつせり
下り流るゝ終るあつせり

古流のやうなものは
まのやうなものは
今も流とていふ人も
かゝるものもあつた
といふもあつた
流のやうな

千代女
かゝるものもあつた
とていふもあつた
今も流とていふ人も
かゝるものもあつた
といふもあつた
流のやうな

新古今和歌集
撰者堀河太政大臣
通具御孫岩倉
内大臣具實云
息堀河太政
大臣基具云也
古老云兼好者
比基具云之侍
歌云是久我
流而尤嫡流也

延政門院

少のいかにしては
いかにしては
かゝるものもあつた
といふもあつた
流のやうな
早蕨のやうな
山かゝるものもあつた
といふもあつた
流のやうな

西 消 諸の流しとか
消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

又 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

^{五段}消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

消 諸の流しとか

都みしきいやまぬは根と

新居の是くしんつるか

平貞通大佛法奥守のあましん

しんつるか

古御らなれあしりき後

族彦くつる後れ浮指

今分洞とくつる武彦の由全澤と

くつる武彦の由全澤と

そはあしりき後れ浮指

ちりき後れ浮指

流らちりき

ふゆの流らちりき

後れ浮指

ちりき後れ浮指

法皇後宇多のあましん

ゆきあましん

もあましん

そはあましん

流らちりき

あましん

あましん

あましん

心も静かき心も静かき
結乃文も静世に
中も静かき心も静かき

世中れは田新きくけりぬ

八位 比叡山 横川

横川に静かき心も静かき

静かき心も静かき

静かき心も静かき

静かき心も静かき

静かき心も静かき

比叡山 靈山院 比叡山 青供 比叡山 奥

静かき心も静かき

静かき心も静かき

被天台大師の月隠重山 比叡山 挙

静かき心も静かき

静かき心も静かき

静かき心も静かき

静かき心も静かき

静かき心も静かき

静かき心も静かき

静かき心も静かき

静かき心も静かき

云世
當代源野井家
之先祖實國
曾孫公清孫
實俊子天台
座主良覺大僧
正兄也

柱の傍ナリ

兼好

松月兼好の影をみれば
しづかに心ゆく
月と無常の影をみれば
心ゆく

もたふの影をみれば

あつたゆめを 経夜の月

小倉比叡山のまはれはあつた

しづかに有明の影をみれば

あつたゆめを 経夜の月

ついでに朝露の影をみれば

あつたゆめを 経夜の月

しづかに新なる影をみれば

あつたゆめを 経夜の月

延政九院の影をみれば

あつたゆめを 経夜の月

しづかに新なる影をみれば

あつたゆめを 経夜の月

五

しづかに新なる影をみれば

あつたゆめを 経夜の月

十院 将朝の影をみれば

あつたゆめを 経夜の月

自建武元至延元九三年

後醍醐 自後成

少くも種々の美ありて一平ちありて 若し國を
たりともつても好むありて一平ちありて 冷泉為藤の
許すもあつてある。

代々種々の昔ありて一平ちありて 家の風を
たりともつても好むありて一平ちありて 浦原

花ありてある

花ありてあるありてあるありてあるありてある

花ありてあるありてあるありてあるありてある

淨舟種々の流業ありてあるありてあるありてあるありて
流ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

花ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

花ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

奥ありてあるありてあるありてあるありてあるありて
花ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

花ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

花ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

比叡 山はほろりありてあるありてあるありてあるありて

花ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

花ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

十原 花ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

花ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

花ありてあるありてあるありてあるありてあるありて

と後より一庵にひらきしきりぬる
小舟守持しりし心ありし具一上座
の住みなりしと云ふに傳へしにぬる所
こそしりしと云ふに傳へしにぬる所

と云ふに傳へしにぬる所
と云ふに傳へしにぬる所

と云ふに傳へしにぬる所
と云ふに傳へしにぬる所
と云ふに傳へしにぬる所
と云ふに傳へしにぬる所

と云ふに傳へしにぬる所

庵のいへぬら
庵のいへぬら

古らな海舟のなれ家ありし
いとこらな海舟のなれ家ありし

鹿島の社
神の法いへぬら

春日所
るれしにぬる所

林のいへぬら

と云ふに傳へしにぬる所
と云ふに傳へしにぬる所

くもるしやうと東海より北なること一
相事とありていふこと一しとていふこと
よふことありていふこと一しとていふこと
あつていふこと一しとていふこと
きささういふこと一しとていふこと
都一席といふこと一しとていふこと
きささういふこと一しとていふこと
さ海と親とていふこと一しとていふこと
あつていふこと一しとていふこと

世中成るること一しとていふこと

あつていふこと一しとていふこと

かくくは和守れ並の是より所上章一
新とありていふこと一しとていふこと
ささういふこと一しとていふこと

あつていふこと一しとていふこと

あつていふこと一しとていふこと

これとありていふこと一しとていふこと

しとありていふこと一しとていふこと

あつていふこと一しとていふこと

伊賀権守橋成ちる年七のいふこと

つとありていふこと一しとていふこと

之たらありていふこと一しとていふこと

一して世の^みは^らる^る者世の^みは^らる^る者
の^みは^らる^るの^みは^らる^る伊賀の^みは^らる^る志願
し^るその^みは^らる^ると^みは^らる^ると^みは^らる^ると
あ^らわ^るら^るり^ると^みは^らる^ると^みは^らる^ると^みは^らる^ると
山持^{崇光院}兼^{十五}丹^後に^任す^る也
園大曆十八^年親應元年二月之日^の御^好
病^喘之由百^其中^の發^心僧^も可^信之由
依^り ^{光明院}上皇勅^典兼^頭和氣清元^越祐^地
且米穀^之不足^と珍^入同七日自^廣忠^奏云
兼^好深^病難^治と^云し^ると^も典^兼頭^の兼
服^目痛^く生^死之^常の^事と^云ら^る桑^門入

喜^ふ所^也と^云る^る振^致肯^く信^じ典^兼頭^の
返^答と^云る^る也^奏之^件米^穀を^運付^く也^氏
了^元行^く

同七日二條^之皇^基公^病之^為病^爲紙^紙并
賀^之好^年米^の欠^之終^二月^十八^日兼^好
平^と自^伊賀^注遣^{上皇}

皇上^詔院^后憫^哀祿^祿就^祛と^活ふ^に於^て
草^庵子^所乃^物古^兼此^法華^經一^部
自^ら兼^の光^子經^源氏^物終^乃廣^慶明^名
卷^頓阿^自守^れ幼^者也^神代^卷二^冊反^右
自^ら兼^此書^に於^二包^之長^二授^け外^に也

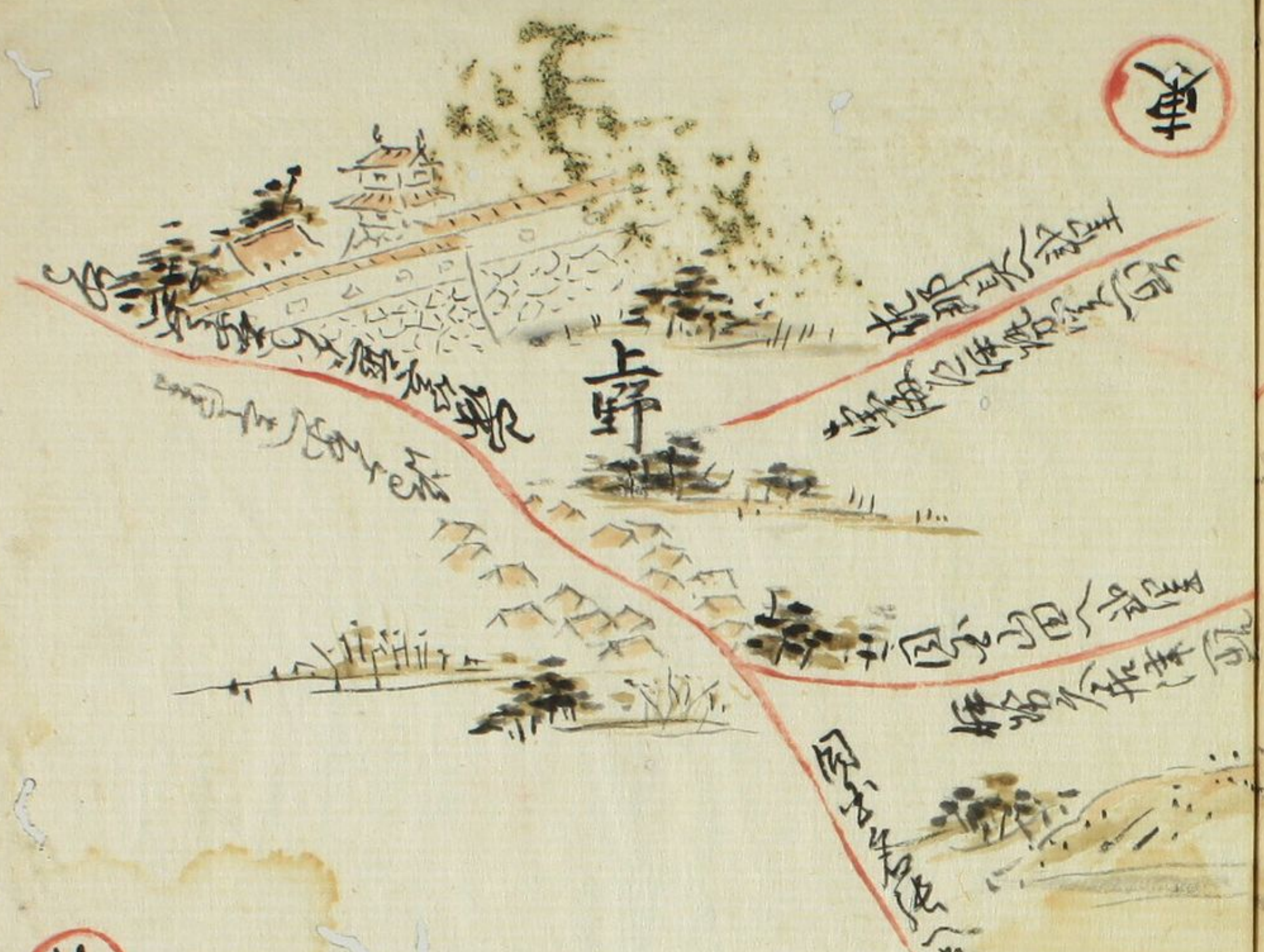
平家公の命の命食院等計也
は五日米五丁名鳥目二千貫と賜り同
舟をたし墓紙巻く遍昭寺と名く此
事と被命伊賀の國分寺被勤葬事
は七日謚賜權僧部 已上園大曆
兼好法師の後の事とて後藤松
丸宗子とせり二條殿 墓基とて
中次正月廿八日
兼好とて
所りし事とて
みしつらり
暎る月

是りし事とて

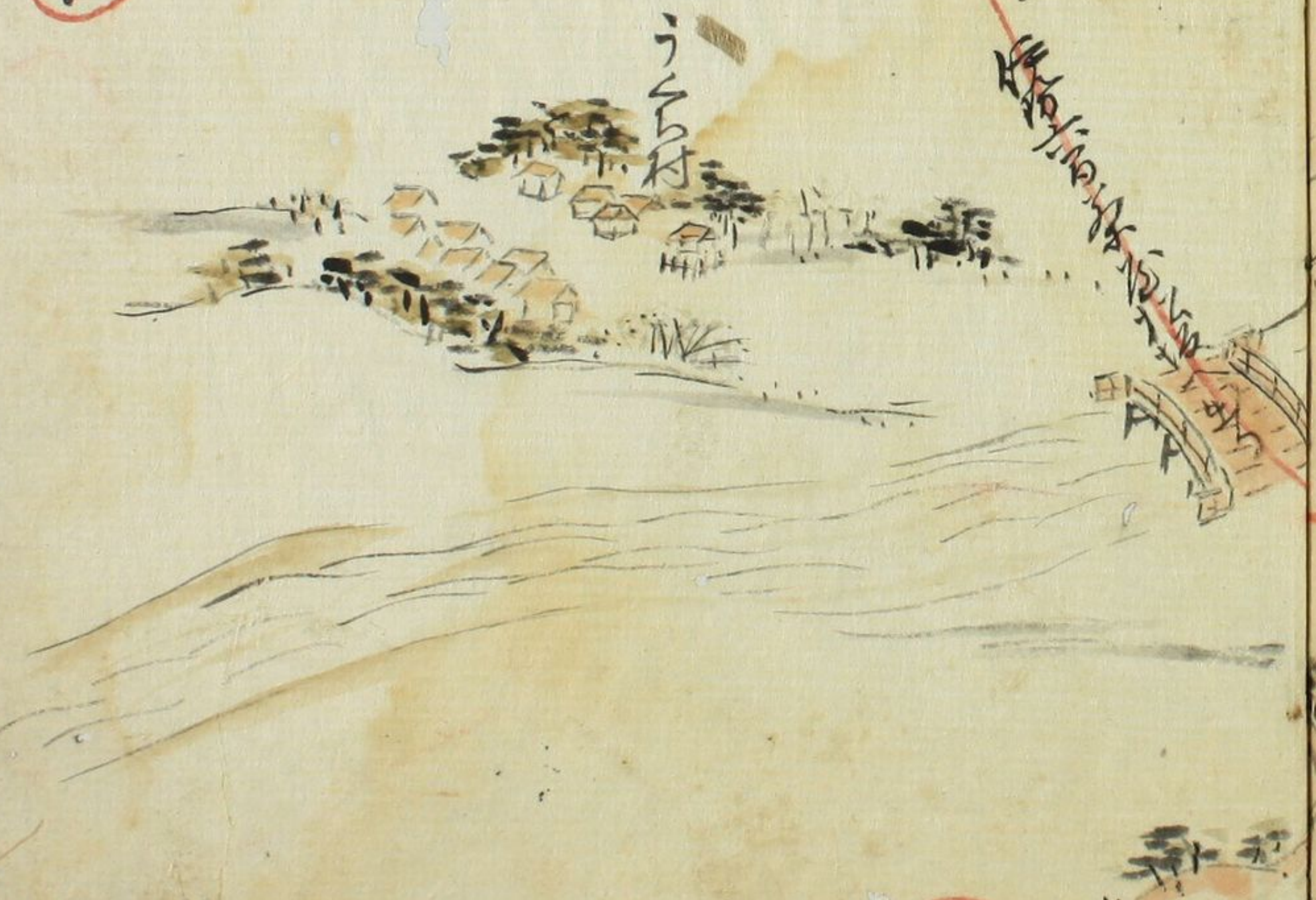
兼好墓所

此墓所 昂田井と名りし

東



北



西

南



稲生

竹の

右後人抄りて一冊に綴り此に
後古記傳覽人の正語に
也

寛保四年甲子二月八日

為

寛延四年辛未初跡写す

